

岡山城二の丸の成立 一考古学的視点から見た宇喜多・池田期の遺構と縄張り一

和 田 剛

1 はじめに

現在の岡山市中心部（内山下・石関町・表町ほか）には、宇喜多氏の入城から近世を通じて備前国の中核城郭であった岡山城の曲輪が広がっていた（第1図）。岡山城は城域の北東隅に本丸を据える。この本丸の西から南にかけては内堀によって二つの郭に隔てられた二の丸が位置する。さらにその西には中堀、外堀により仕切られる三の曲輪、三の外曲輪が南北に連なる。これらを併せ、岡山城の縄張りは本丸の周囲を三重の曲輪で取り囲む「梯郭式」城郭の典型例であったと考えられている⁽¹⁾。

中でも二の丸は石垣化された内堀を境にして、北側には本丸南部を取り囲む「内郭」と、その西に位置する方形の「外郭」からなっている（第2図）。「内郭」は雁形を呈する帶曲輪である。「対面所」や荒尾氏、伊木氏等重臣の屋敷地が位置していた。また曲輪入り口には平門である「外下馬門」があった。一方、「外郭」は「評定所」、「勘定所」などの役所や、家老級を含む上級家臣団の屋敷地であった。曲輪の入り口には櫓門である「西門」、「大手門」、「東門」が位置していた。また曲輪の外縁に沿って「素軒屋敷櫓」、「池田主税櫓」を初めとする6棟の櫓が造営されていた。

このように、二の丸は内堀により隔絶され、門、櫓、石垣を組合せて防衛を固める軍事施設であった。併せて役所や上級家臣団の屋敷地という、政治的拠点と位置づけられる曲輪であったと評価できる。しかしながらこの二の丸がどのような過程を経て成立したかについては諸説があり、結論を見ていない。そこで本稿は考古学的な視点から、これを究明することを目的とする。

2 研究史と本稿の視点

本節では岡山城二の丸の成立に関わる研究史をまとめ、これを受けた本稿における視点を提示したい。岡山城二の丸の成立過程については主に三つの視点から検討がなされてきた。第1は、江戸時代の地誌類を検討した文献史学的な視点である。この方面の研究の鏑矢となったの

は、木畠道夫、永山卯三郎等による一連の業績である⁽²⁾。戦後には谷口澄夫、藤井駿、加原耕作等に引き継がれた⁽³⁾。近年では『吉備前鑑』の検証から、岡山城天守造営と外堀（縄張り）の掘削年代の再検討を試みた森俊宏の意欲作が特筆される⁽⁴⁾。これら文献史から見た岡山城二の丸の成立は、宇喜多直家の岡山城入城に併せ、後の二の丸「外郭」の北東隅にあたる「榎木の馬場」付近にあった蓮昌寺を移転させたことに始まると言う。第2は、岡山藩池田家文庫に残される城下絵図の検討である。倉知克直は最古の岡山城下絵図とされる『岡山古図』を、池田忠雄の備前国移封に際して家臣団屋敷割に用いられたものとしている⁽⁵⁾。『岡山古図』には石垣化された内堀や二の丸が既に描かれている。このことから、岡山城二の丸の縄張りは遅くとも忠雄が備前国に入部した元和元（1620）年頃には成立していたことになる。また、出宮徳尚は江戸時代の絵図に見られる二の丸の縄張りが、宇



第1図 岡山城と城下町の構造 (1/20,000)

※灰色は堀推定位置、黒枠内を第2図で拡大



調査区番号	調査年	調査原因	調査面積	調査概要
1	1989～1990	岡山県庁増築工事	1,592m ²	最下層にて宇喜多期にさかのぼりうる鍛冶炉を確認
2	1994	中国電力内山下変電所建設	1,280m ²	宇喜多期、池田期の遺構面をそれぞれ確認
3	2000	岡山県立図書館建設	2,700m ²	下層期（安土桃山期）の鍛冶炉と堀、中層（池田期）の遺構面を確認
4	2017	警察本部庁舎整備事業	798m ²	宇喜多期にさかのぼる堀、池田期初頭の遺構面を確認
5	2017	警察本部庁舎車庫整備事業	780m ²	宇喜多期2面、池田期2面の遺構面を確認

第2図 岡山城二の丸と各調査区位置 (1/10,000) ※黒色は各調査区の位置

喜多秀家期に成立していたことを図示している⁽⁶⁾。第3は石垣の検討である。岡山城の石垣編年を試みた乗岡実は二の丸「内郭」にある外下馬門櫓石垣と対面所石垣を、それぞれ慶長半ばの池田利隆監国期、及び忠雄の入部を下限とする元和年間初頭に比定している⁽⁷⁾。すなわち、岡山城二の丸は宇喜多期から池田期に至るまで、普請が続いている可能性が浮上したのである。

さて、近年岡山城二の丸では発掘調査により、二の丸成立期に関わる遺構面の検出が相次いでいる（第2図）。そこで、本稿ではこれらの成果に基づき、検出遺構の概要とその変遷を見ていく。併せて各遺構から出土した一括資料の検討を行う。続いて各調査区の時期的併行関係を整理する。最後にこれら検討から導かれる岡山城二の丸の縄張りと、その変遷について考える。

3 各調査区の遺構と出土遺物の概要

岡山県庁増築工事に伴う発掘調査区⁽⁸⁾（第2図1）

本調査区は二の丸「内郭」の東南端近くに位置する。文久3（1863）年に制作された『備前岡山地理家宅一枚図』（以下、『文久城下図』）によると調査地北半は岡山

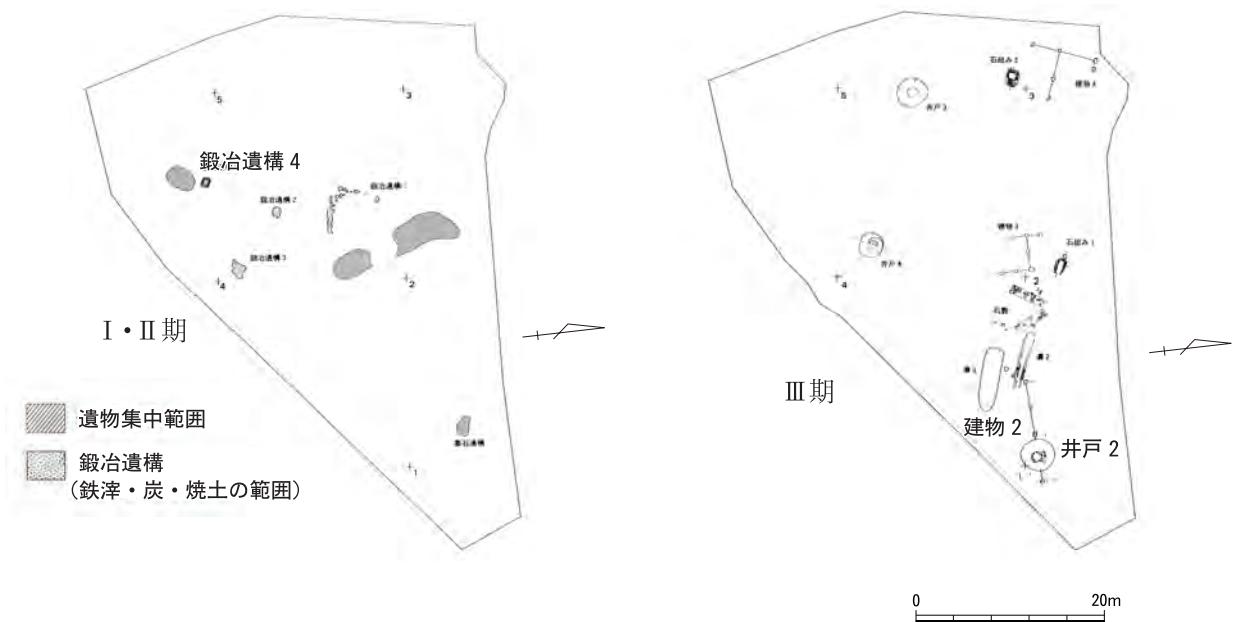
藩筆頭家老である伊木長門守⁽⁹⁾の屋敷地にあたっている。一方南半から県庁舎東側にかけては、重臣池田氏の屋敷地にあたっていると見られる⁽¹⁰⁾。

本調査区では宇喜多期から江戸時代にかけて都合4期の遺構面が確認されている（第3図）。この中でも宇喜多期に遡る可能性があるのは、基盤層上面（最下層）において検出された鍛冶炉を伴う遺構面（I期）である。その上層には遺物包含層（下部層）を挟んで遺構面が形成されていた（II期）。さらにその上層には承応3（1654）年の洪水砂を挟んで検出された、江戸時代前期の遺構面（III期）が形成されていた。

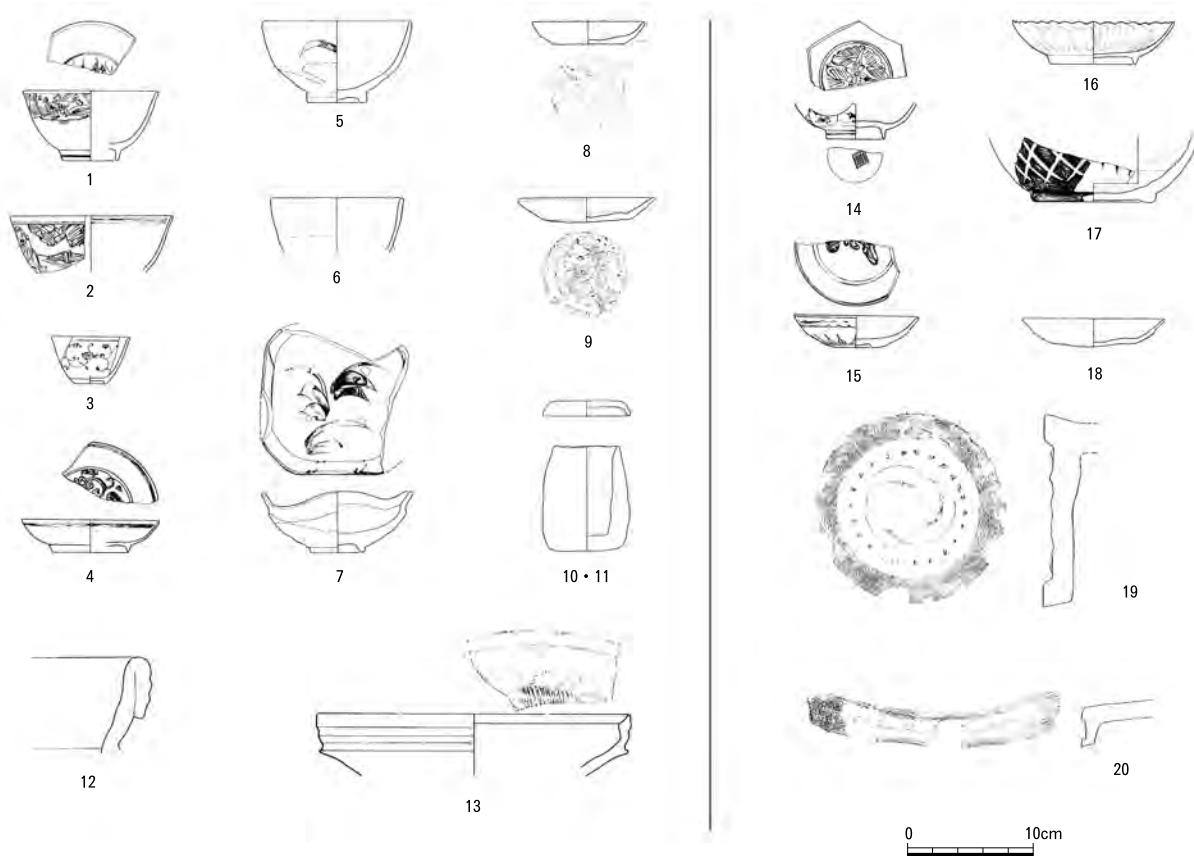
最下層の遺構面は調査区東側で海拔約3.2m、南側で約2.8mを測る。この面では4基の鍛冶遺構が検出された。うち鍛冶遺構4は炉底部のほぼ全面に炭層を残しており、小鍛冶炉であった可能性が説かれている。

III期の遺構面では3棟の建物が検出されている。このうち、建物2は棟をほぼ東西方向に向ける礎石建物である。これを切る井戸2には石組みが見られる。

続いて、出土遺物を検討していこう。第4図に最下層、およびその上層に見られる下部層出土遺物を図示した。



第3図 岡山県庁増築工事調査区遺構配置図 (1/800) ※文献8より引用、一部改変



第4図 最下層及び下部層出土遺物図 (1/6) ※文献8より引用、一部改変

うち1~13までが最下層、14~20までが下部層から出土した。1、2は青花の碗である。1は高台畳付きを釉剥ぎする。3は外面に唐草文を描く青花小型の杯である。これは大坂城跡では豊臣後期、すなわち慶長3（1598）年~元和元（1615）年にかけて主体となる碗H、I類と

共伴することが指摘される、小杯III類⁽¹¹⁾に比定される。4は直径11cmを測る染付皿E群の皿で、見込みに草花文を描く。5は外面に鉄絵を描く唐津の椀である。7は唐津の四方皿である。見込みには鉄絵の草花文が描かれ、胎土目が残る。8、9は土師質皿である。底部成形は回

転糸切りによる。10、11は焼き塩壺と蓋である。12、13は備前焼の甕及び擂り鉢である。14~16までは青花である。14は外面に唐草文、見込みに草花文を描く碗である。底部は饅頭心形を呈し、碗E群に比定される。15は碁底となる皿である。皿C 1群に比定される。17は織部の壺である。18は土師器質皿である。19は軒丸瓦である。珠文は23粒を数える。20は軒平瓦である。中心飾りは単弁で、唐草は三転する。図書館調査区の1147と同范、本丸中段の87aと同范的同文であり、宇喜多期とされる岡山城2式⁽¹²⁾に併行する。

報告書では下部層中で初期の改修がなされ、小早川秀秋から池田忠雄期にかけての生活面が形成されていたとする。しかし、宇喜多期の遺構面を形成するとされる最下層の出土遺物中には、染付小杯III類や唐津四方皿など慶長半ばから元和初頭頃まで下る遺物が見られ、検討の余地を残す。

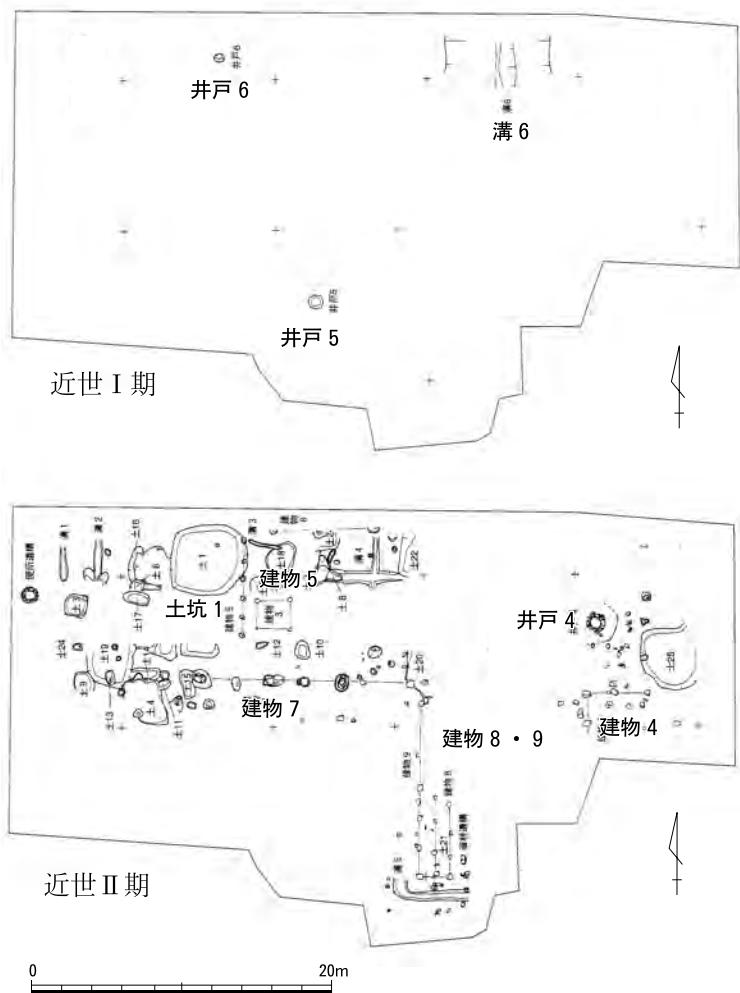
中国電力内山下変電所建設に伴う発掘調査区⁽¹³⁾

(第2図2)

本調査区は二の丸の「大手門」北側に位置する。『文久城下図』によれば、池田伊賀の屋敷地北西隅にあたるとされる。池田伊賀は岡山藩六大老の一人、池田長常⁽¹⁴⁾のことである。調査区では中世に始まり、承応3年の洪水砂で埋没したIII期、そしてその堆積後に形成されたIV期に至る4面の遺構面が検出された。このうち、二の丸成立期に関わるのは宇喜多期に遡る可能性がある近世I期と、その上層で検出された近世II期の遺構面である(第5図)。近世I期の遺構面は海拔約2.8~3.0mを測る。この面では素掘りの井戸5・6と、溝6が検出されたのみである。このうち溝6については、条里方向に沿って掘削された可能性が指摘されている⁽¹⁵⁾。近世II期の遺構は海拔約3.2mで検出された。礎石建物となる建物4、8・9の他、掘立柱建物である5・6が検出されている。また、井戸4は石組みとなっている。

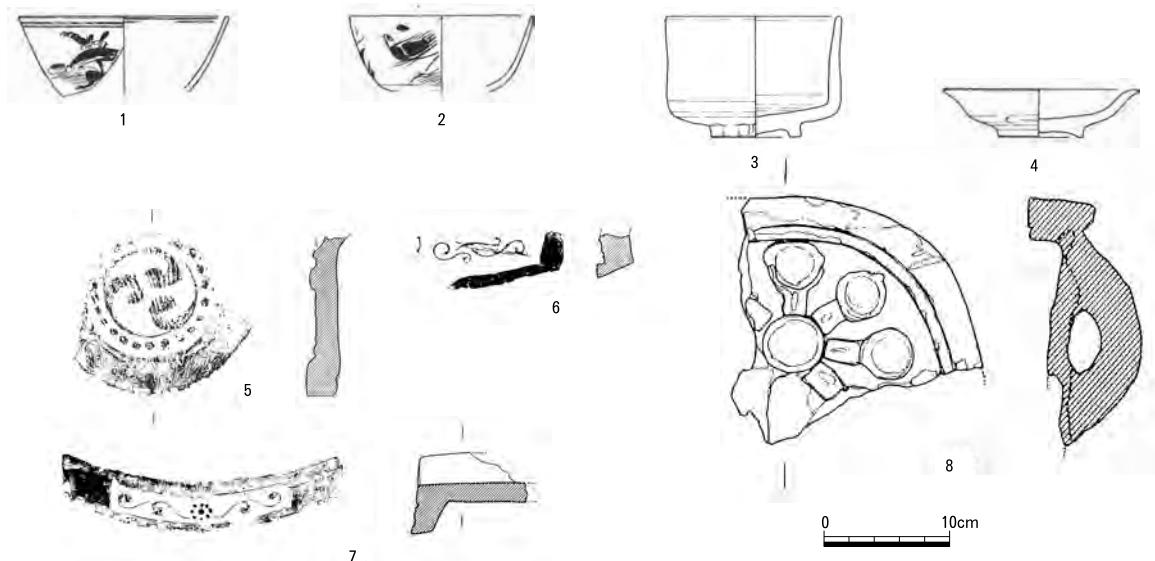
次に、近世II期の遺構面で検出された土坑1の出土遺物について検討する(第6図)。1、2は青花である。1は外面に蛟龍を描く景德鎮の碗、2は呉須赤絵で花鳥文を描く五彩の碗で

ある。3は志野の向付で、高台は削り出しによる。4は唐津の灰釉皿である。高台置付きに砂粒が付着している。5は軒丸瓦、6は軒平瓦である。6は慶長3(1598)年に造成が開始された大坂城三の丸出土3652⁽¹⁶⁾との同范関係が指摘されている。遺物群の上限年代を知る上で貴重である。なお、7、8は近世II期の上層で検出された近世III期の遺構面を覆う洪水砂層出土の瓦類である。この洪水砂層は先述した承応3(1654)年の洪水砂であるとされている。7の軒平瓦の中心飾りと、8の鬼瓦の九曜状文様は、鳥取藩池田家の重臣、福田氏の定紋にあたる⁽¹⁷⁾。元和初頭頃の岡山城下を描いたとされる『岡山古図』では本調査地点が南北二つ屋敷地に分かれていたようであり、北側に「福田某」、南側に「福田内膳」の名が記されている。この瓦の出土は寛永9年の池田光政と光仲の間で行われた国替え以前、同調査地点が福田氏の屋敷地の一部であったことと符合する。



第5図 中国電力内山下変電所調査区遺構配置図 (1/500)

文献13より引用、一部改変



第6図 土坑1及び洪水砂出土遺物 (1/6) ※文献13より引用、一部改変

県立図書館建設に伴う発掘調査区⁽¹⁸⁾ (第2図3)

本調査区は二の丸「外郭」の北東隅に位置する。『文久城下図』によれば、調査区の南東側は「榎の馬場」と呼ばれる広場にあたっている。調査区の東側には「外下馬門」の櫓台石垣が現存する。さらに発掘調査成果により、内堀北辺で岡山城本丸4期（池田利隆監国期に併行）の特徴を持つ石垣が検出された。

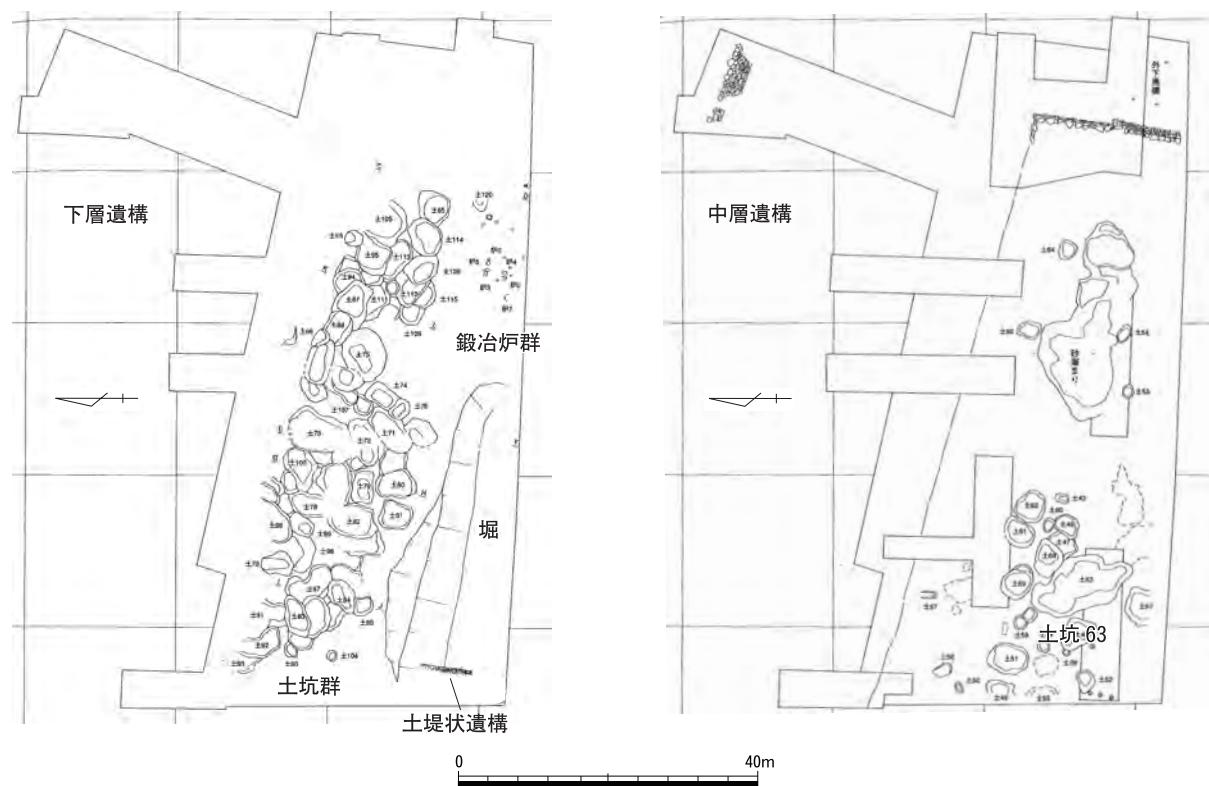
さて、本調査区の「榎の馬場」にあたる「外郭」部分の上層、中層、下層の3面の各層上面で、遺構面が確認されている（第7図）。上層は幕末期、中層は承応3年の洪水砂層に由来すると思われる砂層の下面で検出されていることから、その直前の遺構面とされている。下層は「榎の馬場」の造成土下層で検出された遺構面である。

このうち、二の丸の形成に関わる遺構面である下層遺構、ならびに中層遺構を見ていく。下層遺構には堀、鍛冶炉群、ならびに二の丸「外郭」の北東端に集中して掘削された土坑群などからなる。このうち、堀は調査区の南西隅で検出され、幅10mを超える。西から東へ延び、調査区の中央付近で南の岡山県庁へ向きを変えている。検出レベルは2.8mで、堀底のレベルは-0.6mを測る（第8図左上）。堀底は平坦で、傾斜角も30°以下と緩い。護岸の石垣等は認められず、素掘りの堀であったと見られる。堀の西側では、土堤状の遺構が築かれている。状況から見て、堀の掘削後に何らかの理由で人為的に埋め戻す際、この土堤を築いて足場としたものと見られる。堀の北側では、40基を超える土坑が検出されている。他

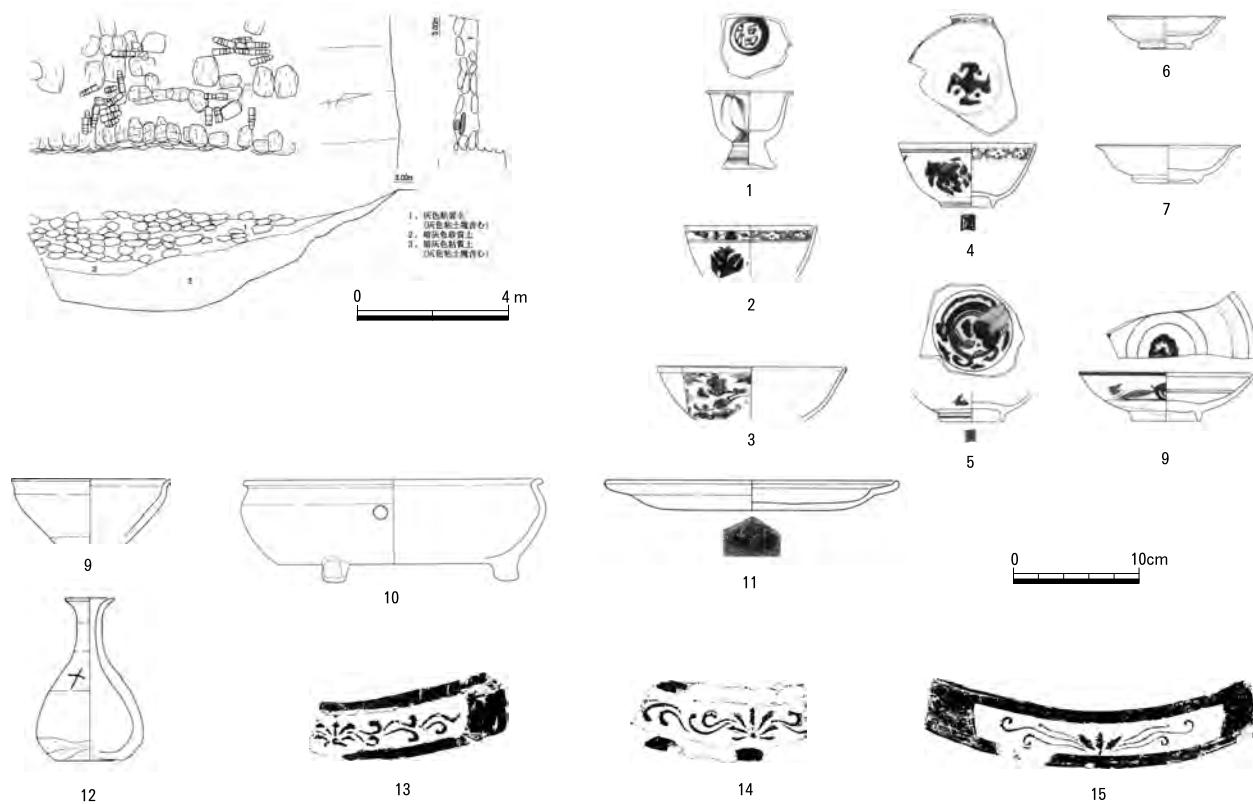
に6基の炉が検出されている。周囲の柱穴から鍛造薄片が出土しており、鍛冶炉であると見られる。

中層遺構は土坑、砂だまり、そして内堀の護岸石垣からなる。中層遺構は先述したとおり承応3年の洪水砂層に覆われることから、この年が遺構の下限年代となる。

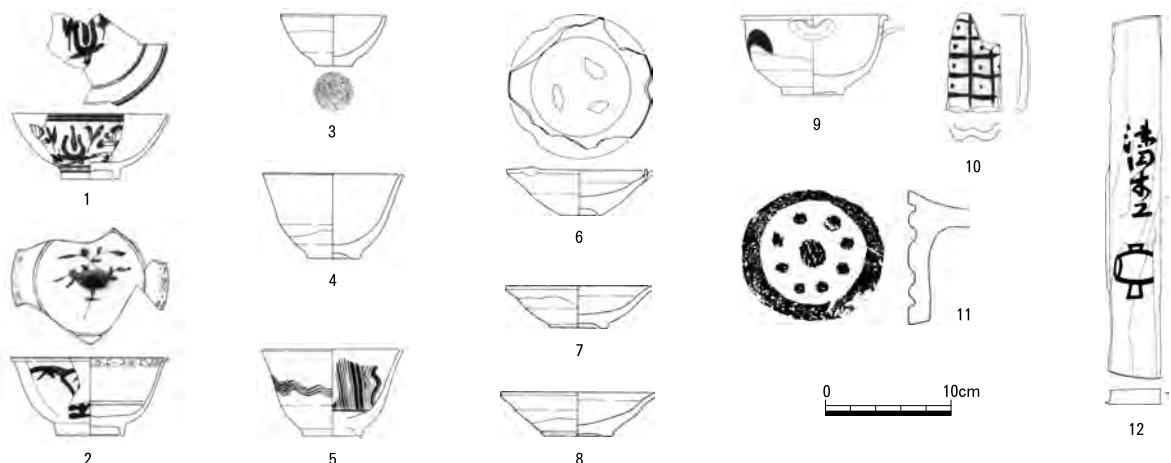
続いて出土遺物の検討を行う。第8図に示したのは下層遺構のうち、堀出土の遺物である。この遺物群については乗岡実による詳細な検討がすでになされており⁽¹⁹⁾、宇喜多秀家期に遡る遺物群であると指摘されている。1～9は青花である。1は脚付小杯である。4、5は底部が饅頭心となるE群の碗で、5の見込みには蛟龍が描かれる。6、7は粗製の白磁皿C群で、漳州窯産の製品である。9は美濃の天目碗で、10は上野・高取の三足平鉢である。11、12は備前焼の折縁皿と辣薺小瓶である。13～15は軒平瓦である。13は唐草が5点する古式のもので、13は岡山城2期の軒平瓦が表記されている岡山市北区徳倉城と同范品である⁽²⁰⁾。15は本丸中の段13と同范品である。いずれも岡山城1～2期に併行するもので、3期以降の瓦を含まない。志野や唐津など、慶長～元和期まで下る遺物も見られず⁽²¹⁾、この堀が宇喜多秀家期に機能していたと見ることには大過ない。ただ、上野・高取産の製品は、生産地である豊前国の小倉城では、慶長7（1602）年に同国に入部した細川忠興による改修の際の造成土から、始めて出土することが指摘されている⁽²²⁾。従って、堀の機能停止、並びに埋没は宇喜多氏改易後の17世紀初頭まで下る可能性が高いものと考えられる。



第7図 県立図書館調査区遺構配置図 (1/1,000) ※文献18より引用、一部改変



第8図 土堤状遺構平面図 (1/100) 及び堀出土遺物 (1/6) ※文献18より引用、一部改変



第9図 土坑63出土遺物 (1/6) ※文献18より引用、一部改変

第9図に示したのは中層遺構面で検出された土坑63の出土遺物である。1、2は青花の碗である。1は外面に特徴的な唐草文を描き、高台畳付きに砂が付着していることからF群に比定される。3～8は肥前陶器である。4は灰釉をかける唐津の碗である。5は刷毛目を描く唐津の碗である。6～8は唐津の折縁皿で、すべて見込みには砂目積みの痕跡を残している。9は唐津の片口鉢で外面に鉄絵を描く。10は織部の向付である。11は九曜紋の棟込瓦である。九曜紋は岡山藩家老の荒尾氏の家紋である。12は桶の底板とみられ「津田木工」との墨書がある。青花碗F群、唐津、織部からなる遺物の組成、刷毛目を描く碗や、本丸2期には存在しない棟込瓦が見られること、岡山藩の家老であった荒尾氏・津田氏に関連する遺物が出土していることから⁽²³⁾、確実に元和初頭以降まで下る遺物群である。

警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査区⁽²⁴⁾ (第2図4)

本調査区は二の丸「外郭」の南部中央に位置する。『文久城下図』では、調査地北半が「土倉彈正」、南半は「御小作地方請込」と記されている。土倉彈正は岡山藩六大老に数えられる土倉一善のことである⁽²⁵⁾。

調査では宇喜多期にかかると思われる下層遺構と、その上層で17世紀初頭と思われる近世I期から幕末期までIII期にわたる遺構変遷が明らかとなった(第10図)。宇喜多期の遺構としては、素掘りとなる堀1条と、その堀岸に築かれた曲輪の土留め石垣を検出している。堀1は調査区の北から続き、中央で西へ向きを変えていることが判明した。次に堀1の断面図を見てみよう(第13図)。堀1の検出レベルは2.8mである。堀底をやや抉るよう

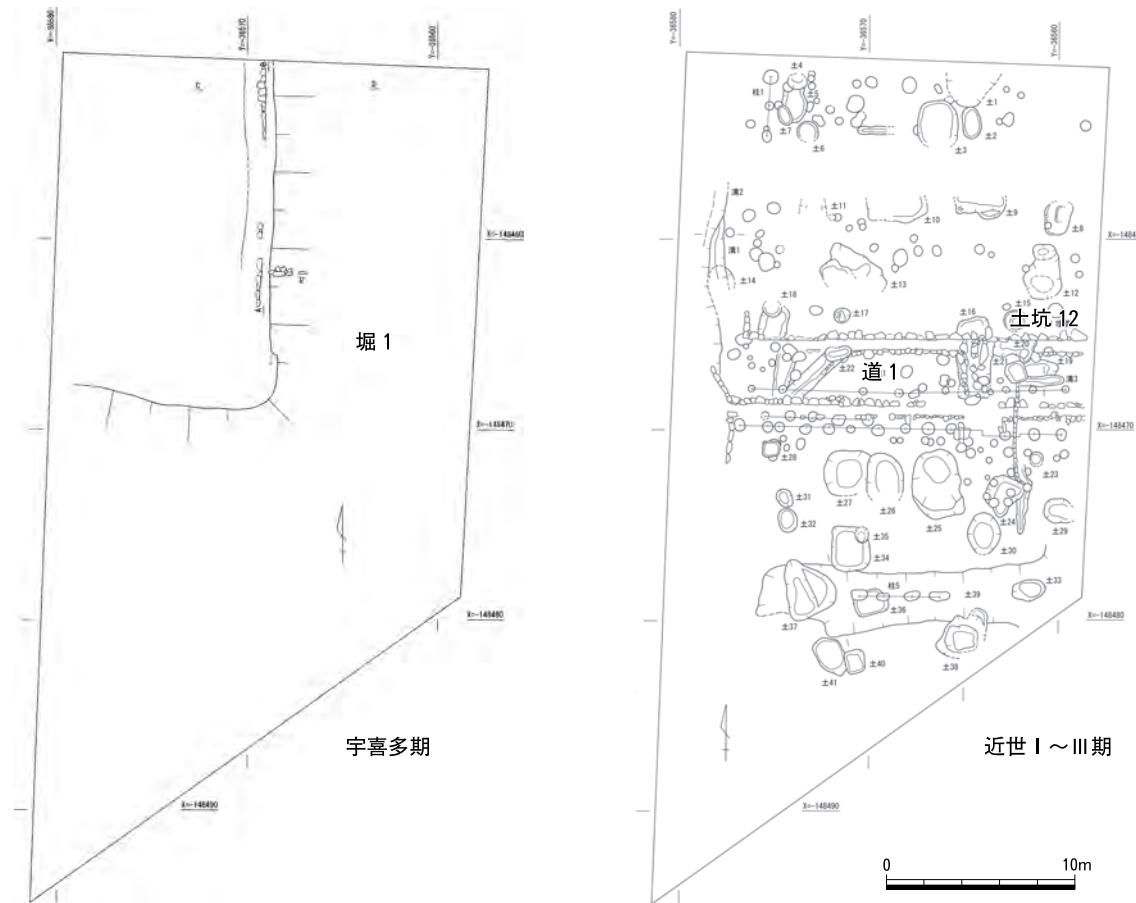
にして粘質土が見られたほかは、均質な砂層により、海拔3.2mまで一気に埋没している。近世I期の遺構としては、石組み溝により仕切られる道1と、北側屋敷地の造成土を切る土坑12がある。道1は調査区中央をほぼ東西方向に走る。南北の石組み間の距離はちょうど3mを測る。この道はすでに『岡山古図』に描かれるものである。その後江戸時代を通じて変わることなく当地点にあったことが、絵図の分析から判明している⁽²⁶⁾。

次に出土遺物を見ていこう。第11図に堀1出土の遺物を掲載している。1～3は青花である。いずれも口縁に界線を描き、3は外面に草花文を描く。細片であるため即断はできないが、文様構成から見て碗E群に比定されるか。4は備前焼の擂鉢で、乗岡実の近世I期に比定される⁽²⁷⁾。5、6は瓦類である。6は軒平瓦で、岡山県立図書館調査区の下層堀出土の1234と同範と見られる。これらは宇喜多期に遡る遺物群と言える。

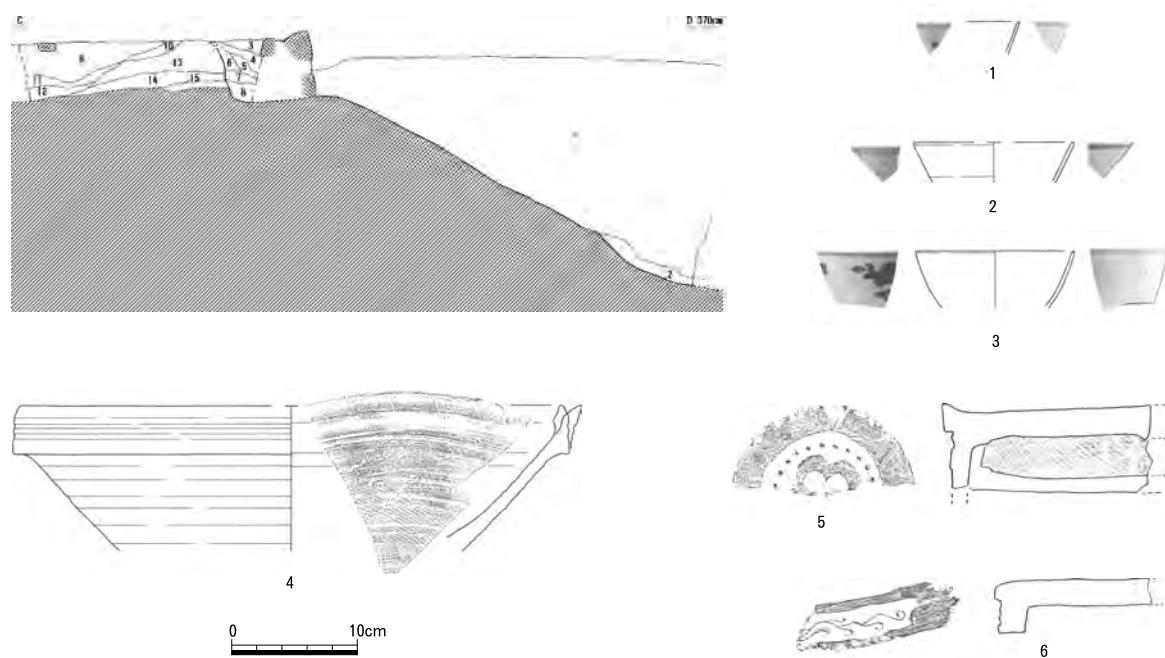
次に、近世I期の遺物を見ていこう。第12図に示したのは土坑12の出土品である。1～5は唐津の皿で、1、2は丸皿、3、4が折縁皿である。3の内面には鉄絵の松葉紋が描かれている。見込みには胎土目が見られる。6は青花の小杯である。森毅のIV類に比定される。肥前磁器が含まれず、唐津皿も胎土目を残すことから、類似した組成を示す岡山城三の曲輪SK72に併行し、概ね17世紀前葉の年代を与えることができる⁽²⁸⁾。

警察本部庁舎車庫整備事業に伴う発掘調査区⁽²⁹⁾ (第2図5)

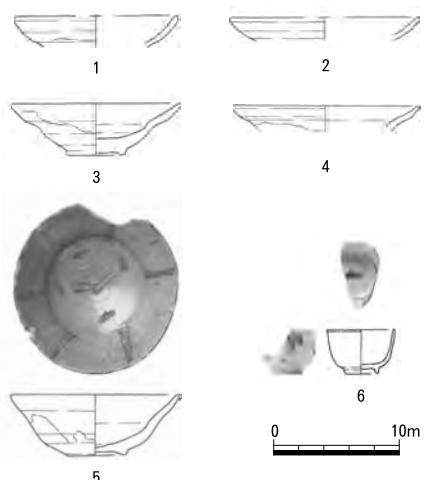
本調査区は二の丸「外郭」のほぼ中央に位置する。『文久城下図』の該当地点には、「日升丸」の名が記されている。「日升丸」は岡山藩の支藩である生坂藩八代当



第10図 警察本部庁舎整備事業調査区遺構配置図 (1/400) ※文献24より引用、一部改変



第11図 堀1断面図 (1/100) 及び堀最下層出土遺物 (1/6) ※文献24より引用、一部改変



第12図 土坑12出土遺物 (1/6)

※文献24より引用、一部改変

主である池田政禮の幼名である。調査地は生坂藩下屋敷の南東隅に当たっており、調査地の西半が屋敷地、東半には屋敷地を区画する道が南北に走っている。発掘調査の結果、近世I～IV期の遺構面が検出されている。このうち、二の丸の成立に関わるI～III期の遺構を見ていく（第13図）。近世I期は本格的な造成開始期の遺構面である。検出レベルはおよそ海拔2.9mを測る。この面では掘立柱建物、井戸、柱穴や溝が検出されている。溝8は調査区を南北方向に縦断している。井戸2は素掘りの井戸である。この遺構面で検出されている遺構からは一切瓦が出土していないこと、この面を構成する造成土層からは、埴輪や弥生土器など、古い時期の遺物しか出土しないことと併せ、二の丸最初期の遺構面と言える。

近世II期の遺構面の海拔高は3.0～3.1mを測る。遺構としては石列、柱穴列、土坑や多数の柱穴からなる。

近世III期の遺構面の海拔高は3.5mを測る。石組み溝を伴う道路遺構が注視される。この道路遺構は『岡山古図』に既に描かれている。道路遺構に沿うように礎石列6や柱穴列6が検出されている。これらは位置関係から見て土塀、あるいは門の基礎となるものか。

次に各時期の出土遺物を検討する（第13図右下）。近世I期の井戸2からは、1～7の遺物が出土している。1は青花の碗で、口縁内部に四方櫛紋、外面には唐草文を描いている。文様構成から見て碗E群に比定される。2は備前焼の鉢である。1～4は埴輪で、2の内面に緑青が付着している。青銅製の鋤が出土していることと併せ、付近で銅鋳造・細工が行われていた証左と言える。

近世II期の土坑7からは瓦8、9が出土している。8は珠文数が25粒を数える軒丸瓦である。軒平瓦の9は本丸中の段6と同様の同文で、岡山城2期に比定される。近世III期の溝7からは、肥前焼の丸輪10や軒平瓦11が出土している。10は畠付きに砂が付着し、全面施釉となることから肥前焼II～1期に比定される⁽³⁰⁾。11は岡山城本丸中の段43と同様で、岡山城4期に比定される。その他、唐津の溝縁皿も出土した。

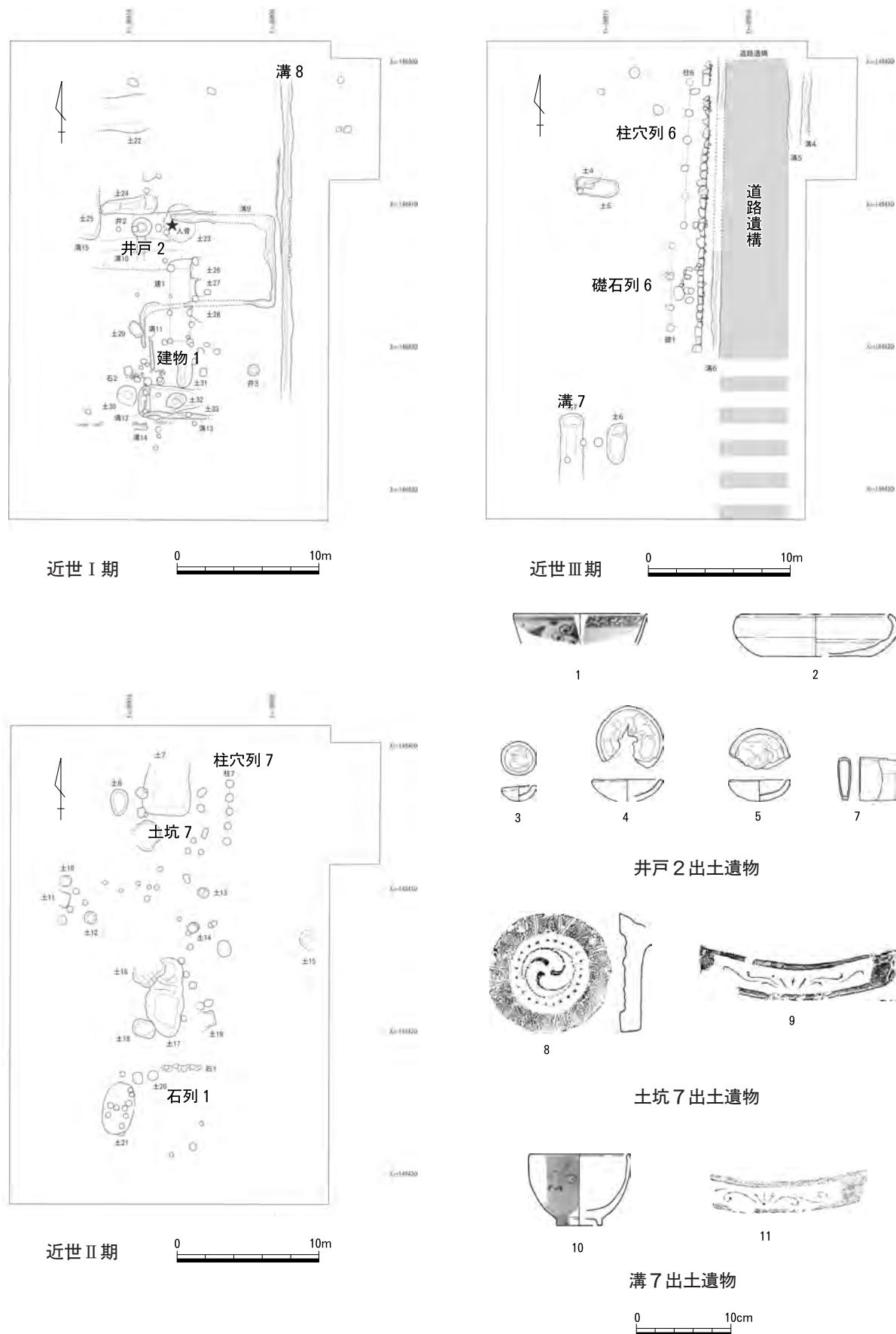
4 各調査区の併行関係

ここでは、遺構、遺物の両面から、各調査区の併行関係を考えていく。二の丸初期の造成面である宇喜多期の遺構面は、全調査地点で確認されている。建物は中国電力調査区近世I期と警察本部庁舎車庫調査区近世I期の遺構面で検出されており、全て掘立柱建物である。井戸は中国電力調査区I期と警察本部庁舎車庫調査区I期で検出されており、全て素掘りである。堀は県立図書館調査区下層期と警察本部調査区宇喜多期の遺構面で検出されている。いずれも傾斜角30°を測る素掘りの堀である。その他、鍛冶炉が岡山県庁調査区と県立図書館調査区で検出されている。

遺物は青花（碗E群、皿C1群）、白磁（皿粗製C群）、美濃からなる。国産陶器では唐津・志野・織部は見られないが、県立図書館調査区の下層堀を埋める土堤状遺構からは上野・高取の製品が出土している。この堀から出土する瓦は岡山城1～2期（宇喜多期）に併行するもので、3期（小早川期）以降のものは見られない。

小早川～前期池田期にかかる遺構面も同じく全ての調査区で検出されている。建物は中国電力調査区近世II期の遺構面で検出されており、礎石建物が主となる。井戸は中国電力調査区、県立図書館調査区、警察本部庁舎車庫調査区で検出されており、全て石組みを伴う。道路遺構は警察本部調査区I期、警察本部車庫調査区III期の遺構面で検出されている。その他、県立図書館調査区下層期ではこの時期と思われる土坑群が検出されている。

出土遺物を見ると、青花（碗F群、小杯III類、IV類）に加え、唐津、志野と織部の見られる点が、前代と異なる。県立図書館調査区下層期の陶器組成は北部九州（唐津・上野高取）が79%と卓越し、これに瀬戸・美濃が7%。志野が8%、織部6%、京1%が続くと報告されて



第13図 警察本部調査車庫整備事業に伴う発掘調査区遺構配置図 (1/400) と出土遺物 (1/6)
※文献30より引用、一部改変

第1表 岡山城二の丸跡各調査区の時期と検出遺構の対応関係 ※印は可能性が想定されるもの

時期	調査区	建物		井戸		堀		炉	道路遺構 (石組み溝)	その他の遺構	本丸時期 (参考)
		掘立柱	礎石	素掘り	石組み	素掘り	高石垣				
二の丸1期	県庁I期			○				○		条里に沿う溝	※1期 2期
	中電I期					○		○		土留め石垣	
	図書館下層(古)					○					
	警察庁舎宇喜多期										
	警察車庫I・II期	○		○							
二の丸2期	県庁II・III期		○		○					集石	3期 4期 5期
	中電II期	○	○		○					土堤状遺構・土坑	
	図書館下層(新)・中層				○			○		道に沿う石垣	
	警察庁舎I期								○	道に沿う柱列	
	警察車庫III期	○	○		○				○		

いる⁽³¹⁾。県立図書館下層堀から出土した遺物には唐津や志野が含まれていない。そのため、下層堀とその他の下層遺構との間には時期差が存在している可能性が高い。なお、乗岡実は岡山城、城下における志野、唐津の出現年代を慶長半ば～元和年間の17世紀前葉に比定している⁽³²⁾。

承応3(1654)年の洪水砂で埋没した遺構面は、岡山県庁調査区III期と県立図書館中層期で確認されている。その他、警察本部庁舎車庫調査区近世III期と中国電力調査区近世III期の遺構面の下限もこの時期に該当する。

以上の対応関係をまとめたものが第2表である。岡山城二の丸は遺構・遺物の組み合わせから2期に区分可能である。1期は素掘りの遺構で占められる。青花や瓦の年代観から宇喜多期に遡行すると考えたい。一方、2期の遺構は石材の使用が顕著である。その上限年代は上野・高取製品の出土から慶長7(1602)年頃と見られる。だが、全ての調査区で唐津の出土を見たことから、中心となるのは慶長半ば～元和年間であったと想定できる。一方、下限年代は警察本部車庫調査区溝7から出土した肥前磁器の年代観⁽³³⁾と承応2(1654)年の洪水層により与えられ、17世紀半ばと想定できる。以上、2期の上限は小早川秀秋(詮)期、下限は池田光政期に比定される。

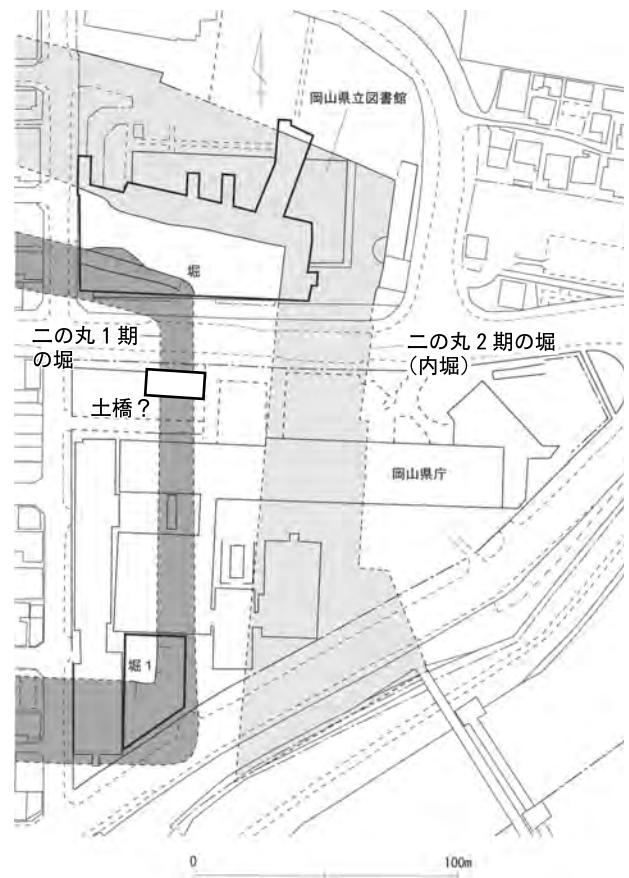
5まとめ

今回の検討で、成立期の岡山城二の丸は2期に変遷していたことが判明した。1期の遺構面では掘立柱建物や井戸と共に、鍛冶炉や銅鋳造に関連する遺物が検出されており、生産域と居住域が未分化であった。

一方、2期の遺構面は石組み溝や道により区分されていた。家紋瓦の出土と併せて、確実な武家屋敷地としての二の丸の成立はこの段階と考える。また、1期の堀は

コの字状に曲輪を画する一方、2期の堀(内堀)は鉤方に曲輪を区画しており、その縄張りが異なっている⁽³⁴⁾(第14図)。これは1期の堀を埋めて、新たに本丸近くに掘削し直すことで、武家屋敷地の面積拡充を図ったと考えたい。併せて内堀の肩口を高石垣化することで軍事機能の強化とも結びついたと思われる。

こうした成立期二の丸の縄張り変遷の背景には、宇喜多期から池田期にいたる兵農分離の進展や、知行制確立に伴う家臣団編成⁽³⁵⁾の様相が反映されていると考える。



第14図 二の丸1期と2期の堀 (1/3,000)

これについては総構え石垣の構築時期と併せて、検討を
続けたい。諸兄姉からのご批判を賜れば幸いである。

註

- (1) 「第3節 岡山城の城郭構造」『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1997
- (2) a 木畠道夫『岡山城誌・岡山私考』 岡山県 1903
b 永山卯三郎『岡山県通史』 岡山県史刊行会 1930
- (3) a 谷口澄夫『岡山藩政史の研究』 山陽新聞社 1981
b 谷口澄夫「岡山城と城下町」『岡山県史』近世 I 山陽新聞 1984
c 藤井 駿「岡山城下町の素描」『吉備地方史の研究』復刻、山陽新聞社 1980
d 加原耕作「岡山城下の変遷」『岡山城』歴史群像名城シリーズ12 学研 1996
- (4) 森 俊弘「岡山城とその城下町の変遷過程—地誌「吉備前鑑」の検討を中心に—」『岡山地方史研究』119 岡山地方史研究会 2009
- (5) 倉地克直「六 岡山古図を読む」『絵図と徳川社会 岡山藩池田家文庫絵図を読む』 吉川弘文館 2018
- (6) 出宮徳尚「岡山城の前身、石山の城と周辺の城」『岡山城』歴史群像名城シリーズ12 学研 1996
- (7) 乗岡 実「岡山城の石垣」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 岡山市教育委員会 2009
- (8) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』78 岡山県教育委員会 1991
- (9) 文久3年当時の当主は伊木忠澄であった。註3 b文献他
- (10) 正富安治「岡山城下絵図」『日本城下繪図集』中国四国編 昭和礼文社 1984
- (11) 森 毅「16・17世紀における陶磁器とその流通—大阪の資料を中心に—」『ヒストリア』149 大阪歴史学会 1995 本稿の青花分類は本論文に基づく。
- (12) 乗岡 実「第3章 瓦について」『史跡保存整備事業史跡岡山城本丸下の段発掘調査報告』 岡山市教育委員会 2001 本稿の瓦の分類は本報告に基づく。
- (13) 『岡山城二の丸跡 中国電力内山下変電所建設に伴う調査』中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会 1998
- (14) 註3 b文献
- (15) 「岡山城二ノ丸（中電変電所）跡（中電2次）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』 岡山市教育委員会 1996
- (16) 黒田慶一「第III章第7節（2）瓦塼類」『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 1992
- (17) 乗岡 実「第3章第2節 遺物について」『岡山城二の丸跡 中国電力内山下変電所建設に伴う発掘調査』 中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財発掘調査委員会 1998
- (18) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』175 岡山県教育委員会 2003
- (19) 註20文献
乗岡 実「岡山城下出土の近世貿易陶磁」『関西近世考古学研究』24 関西近世考古学研究会 2016
- (20) 乗岡 実「山陽・山陰地域の城郭瓦の様相」『織豊期城郭研究会2018年度 京都集会 続 織豊期城郭瓦研究の新視点』 織豊期城郭研究会 2018
- (21) その他、青花皿E群と初期京焼軟質陶器が出土している。
- (22) 佐藤浩司「上野高取系陶器の生産と流通・使用—肥前陶磁器との拮抗の中で—」『中近世陶磁器の考古学』第一巻 雄山閣 2015
- (23) 文献18では『岡山古図』において、「榎の馬場」の南側屋敷地に荒尾図書（成政）、西の屋敷地に津田将監（元匡）の名が見えることが指摘されている。
- (24) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245 岡山県教育委員会 2018
- (25) 『平成新修旧華族家系大成』上巻 霞会館華族家系大成編輯委員会 1996
- (26) 高田恭一郎「第4章 遺跡・遺構について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245 岡山県教育委員会 2018
- (27) 乗岡 実「第V章 近世備前焼擂り鉢の編年案」『岡山城三の曲輪跡—表町 一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査—』 岡山市教育委員会 2002
- (28) 註20文献
- (29) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』247 岡山県教育委員会 2019
- (30) 野上建紀「磁器の編年1. 碗・小壺・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』 九州近世陶磁学会 2012 肥前磁器の年代観は本論による。
- (31) 註19文献
- (32) 乗岡 実「岡山城下町の国産陶磁器の出現年代について」『関西近世考古学研究』18 関西近世考古学研究会 2010
- (33) 乗岡 実は、岡山県下における肥前磁器の出現年代を、元和～寛永年間に当てている。
乗岡 実「岡山県下の肥前時期出土状況」『第12回 近世陶磁器学会 国内出土の肥前磁器—西日本の流通を探る—』 第1分冊 九州近世陶磁学会 2004
- (34) 県立図書館調査区下層堀と、警察本部調査区堀の底面の海拔高は1m近く隔たりがある上、埋土にも差異が認められる。そのため、両調査区間の間に土橋が存在していた可能性がある。
- (35) 池田利隆、忠雄期に家臣団編成がなされた記録がある。
次田元文「池田利隆の家臣団編成について」『岡山地方史研究』105 岡山地方紙研究会 2005
内池英樹「池田忠雄家臣団の知行割りについて—考察—鳥取藩家譜をもとにして—」『鳥取地域史研究』第11号 鳥取地域史研究会 2009